

実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ ——「体験と意識」に関する個別・総合プロジェクトに向けて——

水 島 恵 一

Integrative approaches to human experience and cognitive world

by

Keiichi Mizushima

I. は じ め に

本論は(1)文教大学人間科学部教員を中心に編成された文部省科学研究費による総合プロジェクト「体験と意識」の研究における1つの総合的(実証的)方法を、すでに得られた事例研究により部分的に吟味し、あわせて、(2)より広く人間学、人間科学研究者の研究(学生の特例研究、卒業研究等を含む)における体験研究の具体像、テーマ、方法を投げかけようとするものである。なお当然のことながら、筆者の専門領域からして、人格、臨床心理学ないし人間学における体験研究に主な焦点をあて、そこから出発してより広い領域にかなう研究法への発展を意図するものである。

なお本論では、独自の研究法と道具立てを具体的に吟味するために、人間科学の広い領域にわたった若干の研

究テーマ(本文中カッコで記す)を具体的に設定しつつ記していく。もちろん文中に掲げたのはごく少数の代表例であり、本学総合プロジェクトや関連研究チーム、学生の研究においてはもちろん、広く人間科学研究者に利用していただけるであろう。またとくにⅢ、Ⅳの具体例をみていただければ、心理学、社会学、教育学の十分な素養をもたないかたにも理解でき協力していただけると思っている。本論で示す方法は、人間学領域の理論的課題を、生きた人間とその生活に即して、実証的に科学し、かつ実感的な分りやすいものにするをめざしたものであり、また研究者と被験者が体験を共有し、したがって客観的研究が同時に教育・臨床・自己探究などの実践にも直結することをめざしたものである。

(注) 総合プロジェクトの概要——参考までに本論の当面の出発点である総合プロジェクトの概略を記せば、従来の個々の研究の積み上げの上に立ちながら、体験と実践に総合的な光をあてようとするものだと見える。すなわち人間科学の総合に立った人間学の理論体系を仮説として設定し、最も基礎的ミクロ的体験事象から、自己構造・生活意識・社会文化的経験までを含めた総合的実証研究・実践研究を行ない、それによって理論仮説をさらに検討しようとするものである。このため、

I: 理論研究として①「人間」を体験と意識に根ざしてとらえる人間学の理論体系の確立をめざす。筆者なりの人間学の一つの理論体系の試みはすでに公刊しているが、④それをさらに各領域からの共同研究によって qualify する。⑤特に体験と意識に関する暫定的理論仮説として、できるだけ生物・生理学的に還元された要素ないし要素的構造から出発し、それが生活との関わりにおいて意味を構成し、全体的構造・イメージさらには社会的意識に発展していく全体の連関を明らかにすることが必要になる。なお⑥この理論構成は

必然的に行動科学的方法と現象学的方法を統合する「人間学的方法論」の明確化を伴うことになる。

II: 実証研究として、このテーマにそって②感情体験の心理生理的過剰を明確化し、③それが意味体験として構造化される過程、実存様式、価値意識として結実し、それが社会的態度と結びつく様態を捉える(感情、欲求、態度、自己構造の実証的分析及び成長体験・病的体験の事例分析等を含む)。④それを生活史との関連で発達的にとらえる。すなわち家族・職業・地域・消費文化・余暇などにつき、発達過程と時代的推移をとらえる。⑤社会学的には、都市近郊の生活意識と生活構造の調査研究として埼玉県越谷市をフィールドとし、住民の生活意識、価値意識の多様化、個別化、高い水準への期待値、失望感、統合性の分解、空間的拡散性の程度を測定し、生活構造面の諸項目との対応を分析する。⑥文化的、生活学的には、研究⑤に関連して、衣食住の具体的な生活事象を中心に生活実態と生活意識の調査を行ない、生活学体系のための基礎資料収集を図る。(当該地域の伝統的な民俗事象、生活文化の事例研究及びその史的

II. 総合人間学的体験研究の方法

上記総合プロジェクトにおけるように、「体験と意識」に焦点をあてた場合の、人間科学の総合領域を含むアプローチはいかにして可能であろうか。さらに一般の研究者・学生が体験事象を研究するとき、それが科学的かつナマの人間性に迫りうる道はどこに求められるであろうか。本論においては体験研究の新たな道具だてを導入し、それによっていくつかの領域にオリジナルな光をあてるとともに、それが統合領域へと結びついていく第一歩を踏みだすことを目的とした。

体験ないし認知世界といった主観事象を、その生き生きとした、変化発展の相を含めてとらえることは容易ではないが、人間性や生活に根ざした人間探究のためには不可避な道である。とくに体験学習や心理療法のような実践の自己変革、他者援助に科学が結びつこうとするとき、理論的実証的知識が体験化されるその過程と方法がきわめて重要である。一般に実践の意味をも含めた人間科学として意識と体験にアプローチしていくためには、理論的枠組みが実証的研究の方法を伴っていることはもちろん、それができるだけ実感的体験として被験者にも洞察され、あるいは当事者間、さらには万人が共有しうるような道を見出すことが望ましい。本論ではこの目的に従って、とりあえず3つの方法を考察し、実際にそれがいかに実証的、実践的研究方法として意味をもちうるかを、事例によって吟味したい。

なお本研究法で本質的には認知世界の具体的、現象学的把握をめざしながら、大まかな構造図式や主要要素を重視するのは、筆者が「三相仮説」として理論化しているところによる。三相とは方法論上の相であって、現象学的具体像の把握（地のニュアンスを含む）、構造論的

全体の大筋（または図）の把握、および要素論的（ないしは部分構造的）法則性の把握の3相が人間理解において相補性を示すということである。すなわち、①重要な要素ないし部分構造を問題にすることによって、いくつかの重要な局面をより操作的に研究しうる。②要素および部分構造から全体構造を構成することはできないが、それをふまえることによって、明確化される。この場合、全体構造は蓋然的法則性をもってとらえられる。③同様に、全体構造の骨格がえられても具体的肉づけをもった現象学的世界の理解には至りえず、それは総合的直観によるねばならないが、しかし構造からの理解が現象学的理解を容易にし、逆に現象学的研究から構造的理解のヒントをえることもできる。

以上の方法論的理論仮説にもとづいて、ここではまず研究上重要な体験の要素をできるだけ単純化してとらえ、その構造をもできるだけ単純化してとらえる投影法を工夫するわけである。したがって逆にいえば、この方法によってみれる諸要素の存在すること、測定しきれない構造のニュアンスがあることは大前提で、それらに関しては新たな仮説と方法によらなければならない。また現象学的世界のニュアンスが著しく捨象されることは明らかであるが、但し治療的变化によって実証（後述）されるように、現象学の世界は余韻や余白によってかなり大幅に生かされる。こうした余韻・余白をともなった直観相を生かすところが、従来の測定や調査にはみられない人間学的な独自の方法であり、そのためにとくにⅢAに記すようなイメージ瞑想、注視、動的過程を重んじることになる。

V節に述べる諸研究テーマの分類に即していえば、基礎的一般法則の研究が主として要素ないし部分構造の相を問題にし、統計的パーソナリティ研究や関係性、集団

研究を含む。以上の④⑤⑥に関しては比較的通常社会調査法を基礎に持つが、内容的には基礎的体験様式との関連及び、衣食住、保育、教育及び実践研究に関わる諸事象との関連にも焦点づける。また方法的には事例研究を含める。これらを通じて体験と意識の構造を生活構造、及び社会過程との関連においてとらえることになる。

Ⅲ：実践研究として研究⑦体験学習による生活意識の変革の過程と方法を感じ性訓練（イメージ、芸術的方法を含む）、役割演技（特に行為法）によって吟味する。研究3の実験的方法は、実践的には多くが体験学習や心理治療過程としてここで不可分にとらえられるものである。また青少年キャンプの体験資料もすでに得られているので、それを意識変革の観点から整理する。⑧さらに児童教育、遊戯文化活動の基礎研究として第1に児童文化環境の構造的把握、とくに身近な文化財に関する意識の調査、第2に生活における遊びの直接観察を通じて遊戯内容、遊戯集団構造の明確化を行なう。⑨

④障害児を対象とした実践の事例研究をつまあげ、その過程における親の意識、実践者の意識、その変化を明確化する。⑤臨床、福祉、教育の一体の総合的実践過程を明確化する。①Aと関連して既に大筋は体系化されているので、その枠組に基づいて諸実践を再検討し、実践理解の深化と体系化をはかるわけである。

なお、ここに吟味する方法は上記総合プロジェクトとの関連でいえば、チームの討議によって研究全体の方法として設定されたものではなく、方法論研究(研究1b c)、基礎的体験研究(研究3)、体験学習研究チーム(研究7)の探策を中心に、主として筆者の発案によって展開しているものである。実際の研究はそれぞれ独自の的方法論によって行なわれるものであり、その一つの総合的方法を吟味するのが本論の主旨である。

(以上は文部省登録の本文を若干編集したものである)

構造などの研究が主として全体構造を問題にし、具体的な事例研究、とくに変化や流れを生かす治療、成長（体験学習）の過程そのものは、現象学的な相において可能になるということができよう。

以下に本研究独自の3つの方法をまず紹介し、それについてそれぞれの方法を適宜用いた研究事例を報告する。Ⅲ節に記す方法をもってしてはその具体的な用い方が十分に伝わらないと思われるので、その点についてはⅣ節以下の具体的なテーマに即した事例を参考にさせていただきたい。

（注）本研究独自の方法の他に、当然のことながら通常の観察、社会調査、SD法その他の心理測定、質問紙テスト、投影法が併用されることが多いわけであるが、この中には本研究独自の方法を容許した（人間学理論に即した）いくつかの質問紙やスケールを作製、検討するという作業が含まれる（小研究1A）。また、投影法についても従来の投影法、特にロールシャッハ、TAT、SCIT、HTP等は本研究独自の方法と深い関係にあり、かつ併用しうるので、その相互関係および併用した場合のテストとしての吟味ないし標準化がやはりそれぞれ研究課題になる（1B）。その他にも方法的基礎小研究（1C）が必要になるが、これらについては部分的に次節以下で触れるにとどめる。また総合研究に含まれる生理測定との関係もきわめて重要であるが、本論では省略し、ただ実感的体験（とくに感情体験）の実感度の生理的客観的チェックとして、諸イメージ研究との対応が常に問われることを記しておきたい（1D）。

Ⅲ. 新しい投影的体験研究法

A. 簡素化されたイメージ・箱庭の投影法：本研究独自の方法として「研究者にも被験者にも実感が結実しうるような投影法」という観点をまずとりあげるとき、当然に諸芸術療法的手法が考えられる。しかもさらに体験の流れないし変化発展の相をも重視しようとするときには、イメージ面接・心理劇等の連続的表現法が有効なわけである。しかしこれらの流動的投影法は逆にある瞬間を固定して構造を可視的にし、さらに要素的測定にまでもちこむためにはきわめて不便である。この点では、絵画・箱庭・詩のような形式をとった方が可視的かつ測定可能である。

そこでイメージ面接のような連続の流れを生かすことと、絵や箱庭のように客観視できることを同時に生かすにはどうしたらよいか。ここに箱庭の道具を使って、しかもイメージの流れに応じて場面や駒を動かしていくという発想が生じるわけで、これが我々の箱庭人形劇の理

論的根拠だといってよい。（日本教育心理学会抄録1978）。すなわち箱庭療法の材料を若干モディファイして、より単時間で作品を作り、一定の介入によって更にその作品を変化させていくという方法である。とくに自己を現わす駒を決めて、人間関係の吟味を行なうのに適しており、この場合背景を使って内面の投影も可能である。また、たとえば自己の分身にあたる材料を1つないし2つ用いることによって、自己の二重人格的な世界や、関係性を表現することも可能である。こうした様ざまな方法を用いて、通常の箱庭作品では測定しえないダイナミックな流れを事例研究することの意義は大きい（小研究2A）。また集団でこれを行なうときには、有効なTグループの過程が吟味しうるだけでなく、集団の中での関係および集団に対する認知構造、および集団の客観的構造を把握することができる（2B）。心理劇やゲシュタルト療法的対人過程をモデル化しているわけなので、その対応関係が研究されることもきわめてのぞましい（2C）。逆に、個人作品の材料を操作的に限定することにより、より要素的、操作的な関係性の吟味に至る（2D）。たとえば父・母・本人の三つの人形を用いその静的関係性を測定すること、父や母を動かして状況を変化させることによって関係の動きを吟味することなどである。諸々のテーマについてはⅣ節(7)~(9)を参照。

以上のように箱庭療法または箱庭人形劇を測定と治療の双方に用いる場合、様々なヴァリエーションが考えられるが、その中で材料をできるだけ少なくし、しかも内面の投影を生かす方法が「俳画的箱庭」と筆者らが名付けているものである。この方法にもまた多くのヴァリエーションがあり、研究、テストとしては標準型シリーズを作製しつつある段階であるが、1例として、B5版の白紙の上に木1本、草1枚、被験者にみためた人形1個を基礎材料として与え、自由な表現、喜怒哀楽、逃避、依存、攻撃等のごく基礎的な感情、欲求のテーマ、その他の指示によって情景をつくる方法があげられる（小研究2E、図1は自由作品例）。これは研究、測定上はできるだけ変数を少なくして操作性を高めるねらいからであるが、治療的にみて重要なことは、単純化された投影場面の中に深い心性がもちこまれ、かつ変化発展するという点に着目したものである。これは、日本の俳句、俳画その他多くの芸術において素材の制限・表現の簡潔性・余白余韻が重じられること、日本におけるカウンセリングやTグループを含めて、心理療法における沈黙や簡潔な表現の意味としてすでに考察したところである（有斐閣「臨床心理学の基礎知識」参照）。

なおこの「俳画的箱庭」は簡素化してあるだけに、イ



図 1

メージ面接や通常面接と併用して心理治療的、体験学習の効果（とくに内面的深化）をえやすい。たとえば一定の場面において、その情景に基づいた簡単なイメージ面接を導入し、実験者が一定の仕方では介入することなどであり、治療的力動的な過程を促進しかつ客観的にとらえることができる（小研究2 F）。もちろんこれと関連して、箱庭の材料によらずに指定イメージを与えて、そのイメージ過程をテスト（2 Gイメージテスト——水島他臨心研1969）、または治療・体験学習（2 Hイメージ面接）としてとらえること、自由なイメージ面接や絵画イメージ療法などの過程をとらえていくこと（2 I）などは重要な関連研究であり、それに次述B、Cの方法を併用していくことの意味も大きい。（すなわち本方法は、事実上、イメージ面接、箱庭人形劇、俳画箱庭の3下位テストから成るが、研究目的によって適宜使い分けられまた総合的に用いられるわけである。）

B. 図式的投影的表現法：前記箱庭の人形表現をさらに簡素化すれば、抽象的図式的な駒と背景を用いることができる。我々が通常学術書や講義に用いている図式も、一定の（比較的単純化された）要素ないし要素的構造を現わしながら、同時に（その視覚的イメージに基づいて）体験の実感をもたらすという投影的效果をもっていることが多い。もちろん本研究で一義的に問題にするのは認知世界の図式であるが、それは客観図式とある対応をもつ。いずれにしても、図式を固定化して吟味すれば、通常の書物で用いられているような構造吟味となって客観研究の言語となり、これに対して図式を実感的に視覚化し、しかも移動、変化させるときには、その図式を体験化し、生きた流れを促進することになるということが、予備研究の結果確かめられている。そこで図式の要素にあたるものを円形の駒ないし後述するカードで現わし、構造連関を現わす線を針金で現わし、これらの駒、カード、針金を自分の感覚に従って配置すれば、構造研究と

体験研究のはしわたしをすることができるわけである。図3、6などに典型的に示されるが、IV節で一括して例示することにする。当然のことながら、とくにカウンセリングやTグループでは、箱庭人形との併用が可能である。なお円形の駒を用いた場合と人形を用いた場合の差も、基礎的研究としてチェックされつつある（小研究1 E）。

C. カード配列による認知世界の投影：投影法の主旨を生かしながら、しかも重要な要素をできるだけ包括かつ操作的にとらえる試みとして、実感化しうる要素語を配列する方法が、おそらく最も広域的研究法として成立する。最もマイクロな領域を例にとれば、要素的感情を1文字の書としてカード化し、配列することが考えられる。たとえばプルチックの操作的研究によって導きだされた8要素を若干変形して、驚・恐・悲・嫌・望・怒・喜・愛のカードを作成、図2 Aのようにある状況下での感情を配列させる方法である。これによって様々な状況下での感情の基礎的構造を操作的に知ることができる（小研究3）。もちろん次節に述べるように、カードの数を増すこと、白紙カードを用いて任意に適切な語をそつど記入していくことなども可能である。また欲求や態度のカード、対象カードを配列し、漸次複雑な人格構造から関係・社会構造へとテーマを発展させていくことができる。一般に図2 Bのように、具体的対象カードが出現すると、心的構造の実感もより具体的になる。ただしすべての場合において、カードの数があまりに多くなり、構造が複雑になれば、実感をはなれた既成テストとかわらなくなるので、枚数を増した場合でも、図2 Bのように、上位3～6ぐらいに意味をもたせるにとどめた方がよい。その他次節最後の「投影盤」として述べる工夫を参照。

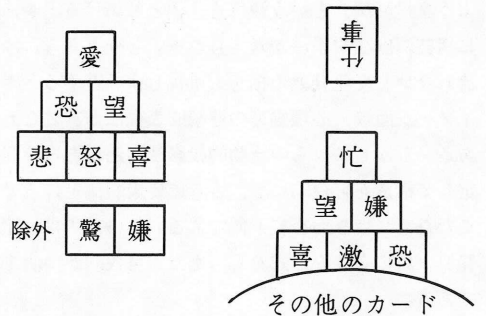


図 2 A

図 2 B

IV. 基礎的感情から社会文化構造に至るまでの体験研究の実際と事例

以上に述べた3つの方法を用いて、基礎的感情から欲

求、態度、自己像、関係性、集団・社会像に至るまでの認知世界を個々に、また総合的に研究していく諸テーマの具体像と実例を以下に略述して吟味の対象としたい。なお要素間の関連をできるだけ視覚的にとらえるため、ここでは(箱庭材料を用いるとき以外は)人を現わす駒を円形にし、人以外の諸キーワードを要素として現わす場合は四角のカードを用い、なお必要に応じて色を用いる。

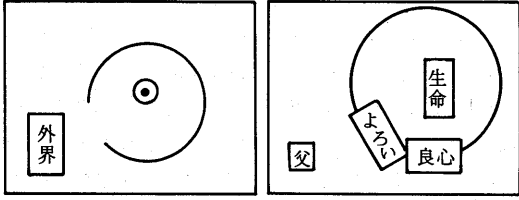


図 3

図 4

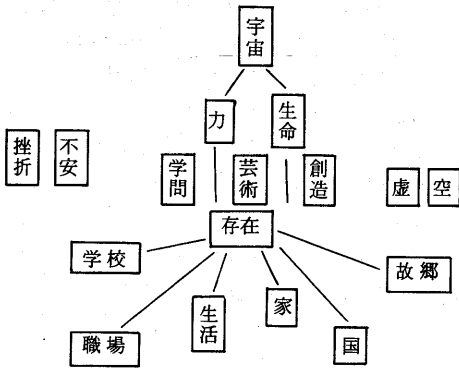


図 5

(1) 諸テーマに入る前段階としての既成テストとの関係、(2) イメージ・箱庭関係の投影性自体の吟味についてはすでに述べたので省略する。

(3) 基礎的感情とその構造化:すでに前節Cでプルチック8要素によるカード式基礎研究について述べたが、各感情語の距離や構造連関をSD法などによってあらかじめとらえておくこと(3A)、日本人における感情因子の新たな設定(3B)、プルチック8要素に追加する形でさらに感情語を追加し吟味すること(3C)、などがその基礎を固めることになろう。さらに図2Aの頂点に2つのカードを並べること、その他配列の様式を変えることによって、感情複合その他の構造変換にもある程度アプローチすることができる(3D)。比較的一定の感情をイメージさせる対象語(「美景」「敵」など)を置いて吟味すること(3E)、ある感情状態を実際に高めて実験すること(3F)なども基礎的研究になる。(感情を高めながら同時にそれを測定していくという、従来難点とされていた点にひとつの光を与えられる。)一方、具体的対象

に対する感情の吟味は、図2Bのように対象をカード化し、それに対するプルチック8カード(図2A)を配列するような方法(3G)によって最も簡単にできる。

(4) 欲求・態度などの構造化が、おそらく次のステップとして重要なテーマとなる。前に基礎的な感情と呼んだものも文化的(とくにイメージ的言語的)に構造化されたものであるが、この構造化の仲介変数として、我々は同じように、欲求、態度のいくつかの重要要素をカード配列し、それが感情構造とどう対応するかをみることができ(4A)。様々な研究が可能なのでいちいち列挙はしないが、もっとも簡単にはたとえばマレーの欲求の分類に基づいた欲求語を置き、その際の感情構造を測定することなどがあげられる。この場合にも実感的に体験化するためには、カードの語を実感的なものにすること、イメージ面接や前述の俳画的箱庭を用いて場面の実感を高めて行なうことなどが必要である。(図2Bの頂点の「忙」のかわりに「達成」という欲求語ないしそれを実感的に変容した「努力」という語をおくことなど。4A)なお当然に欲求カード自体の構造化(4B)、態度カード自体の構造化(4C)が感情カードの場合と同様に吟味可能であるが、ここでは省略する。またイメージ・箱庭法による欲求・態度分析(4D)も省略する。

(5) 自己像吟味のためには、人形も用いるが(Ⅲ節)、カード式、図式的投影法を中心に述べる。基本的には、図3のように外界(カードで表示)に対して自己の核(円形駒)と自己の枠(針金)によって表現・テストされる(5A)。この場合、カードを単に「外界」とせず「社会」「自然」「家族」「他人」「Aさん」等の語を用いて、それぞれの外界要因の差によって自己の核と枠がどのように変化するかをみることができ(5B)。

次に自己像にさまざまなヴァリエーションを持たせることができる。たとえば図3の「自己の核」のかわりに「生命」というカードを用い、針金を「自我」と規定するときには、心理学の講義でよく用いる理論枠に従った置き方ができる(5C)。防衛的な被験者は、枠を太く硬く閉ざすなどのことが見られる。さらに自我の枠の上に「よろい」「統制」というような限定された自我語を配置したり、「神経質」「のんき」などの性格語を置いて同様の吟味をすることができる(5D)。また自我とは別に超自我を現わすカードを用いるなどのこともできる。もちろん外界カードを適宜かえたり、2つ以上のカードを(ときには構造化して)検討することも含まれる(5E)。図4は父親に対する自我防衛と超自我を現わした素朴なフロイト理論の図式であるが、自己の実感に基づいたクライエントがこのような作品を作ったり、作りかえたり

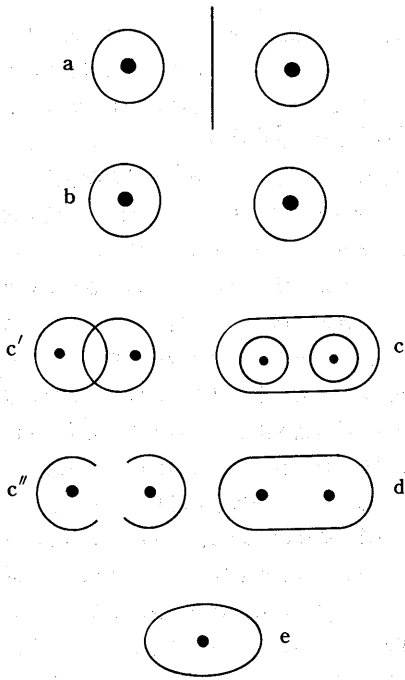


図 6

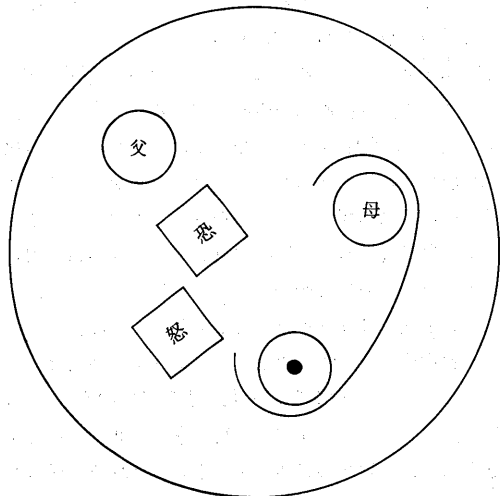


図 7

していく過程が同時に体験学習として有効なわけである。これらのカードを一定にした場合の図、自由に記入して使った場合の図の双方が検討可能である。このほか図4の「生命」のかわりに「心」を用い、枠の「自我」のかわりに「身体」を用いて身体像を測定すること(5F)、その他多くの類似の形が可能である。

(6) さらに自己の**実存領域**に至るときには、簡単で実感化しうる実存、生死観などに関するカードを用いることがある。カードの設定の仕方、枠ぐるみの設定の仕方、

その他の条件設定によってきわめて多様な研究が可能なので、ここにいちいち列挙はせず、1例を図5として示すにとどめる。ここでは具体的な他者が想定されていないので、円形の駒はなく、また自己、集団の枠や境界を現わす針金もなく、針金は連結のためにのみ用いられている。「存在」というカードのかわりに自己を現わす駒でもよかったという感想が得られている。今までに述べなかった新しい置き方ではあるが、1つにはこの被験者が自己の枠や集団の枠をあまり意識せずに生活しているので、このような置き方が実感に即していたようである。なお深層世界のニュアンスを箱庭や絵画によって補足的に表現することができるのはいうまでもない。すでにえられている実存的Tグループの中では、宗教的実存から、サルトル流の実存様式に至るまで、さまざまなものが感覚的に表現されている。

(7) **関係構造**として通常のかかわりの構造は既に図4などに示されている。図4の「父」を円形の駒にし、その他の重要人物も駒として登場させ、感情カードや「依存」「役割」などの関係性カードを適宜用いるというようなことである(7A—図7について後述する)。臨床、福祉、教育実践者が対象者とのかかわりを吟味するようなことも重要なテーマである(7B)。

ひとつの重要なポイントは、(6)までに述べた自己の下部構造と同様、他者の下部構造をも認知しつつ、自他の

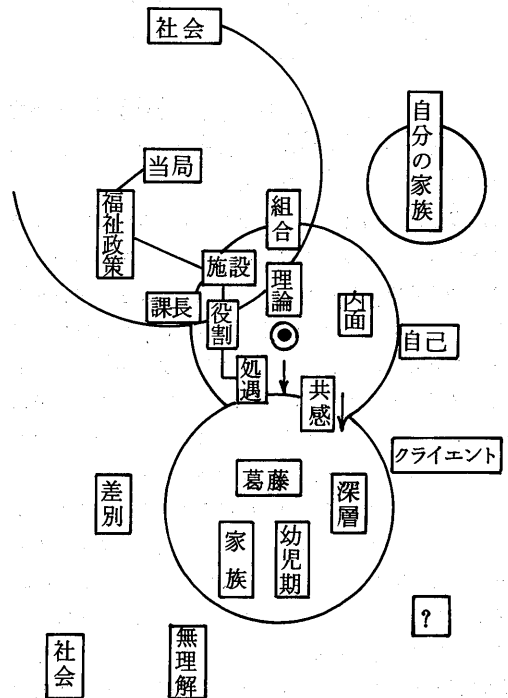


図 8

関係構造を吟味することである。第1には、2人の人がそれぞれの自己を、たとえば図1のように感情カードで作り、その二作品を向きあわせることである(7C)。当然に、相手に対する感情が相互に表明されつつ、そのつど相手の出方に応じて変化していくという過程がみられる。これに対して図8のように他者の感情や内的世界を作製することは、主観的他者認知であるが、共感性の測定や訓練過程、とくに親の子に対する認知、教師の生徒に対する認知、カウンセラーのクライアントに対する認知などの実践訓練研究として重要である(7D)。このように、他者を具体的に認知しつつ、しかも関係性や集団構造をとらえることは、9以下に述べる人間学的社会学のポイントになる。(関係性を箱庭人形でテストする例は3節Aで述べた。)

(8) 関係構造の中で、とくに現在筆者らがこの方法を用いて探求しているのが、**共感的・共同存在の関係構造**である。図6はその最も単純な表現であり、2人間の断絶(a)から、連帯(c)、一体感(d)、を経て没我的共感(e)、に至るまでの主な相を示す。これは2人の共感関係だけでなく、Tグループにおける自己開示の過程、逆に共生関係から個我の独立に至る過程などを含んだ自己像評定尺度として、筆者らが(質問紙式チェックを含めて)開発しつつあるものである(8A)。しかし駒と針金を用いて体験学習として行なうときには、図bの距離を近づけたり遠ざけたりすること、c'やc''のような表現法、あるいはeの場合に自分(の駒)を相手の下に入れてしまうなどの表現法が多くみられる。こうしたダイナミックな諸相を、条件に応じて統計的に検討すること(8B)、他のテスト法と関連させて詳しく検討すること(8C)、が現在進行中である。なおここでも自己超越的世界の内実を箱庭の道具(草、石など)によって実感する体験学習が(「空」「無」「神」等のカードを用いた場合と同じく)実際に体験深化のために有効なことが認められている。

(9) **小集団の構造**を検討することは、駒と針金が最も有効な領域の1つである。とくに針金で家庭を現わし、家族1人1人の駒を配列し、様々な状況下での家族関係を吟味することは簡単なテスト(9A)としても、またカウンセリングの補助(9A')としてもきわめて有効である。図7は母親への依存が強く、父に恐れを抱いている青年の例であるが、感情カードを併用することによって一層実感が高まり、これが治療的自己表現の役割をなして、のちの作品では配列が変化し、短期治療が成功した例である。同様にして、Tグループの集団過程(9B)、仲間集団の構造(9C)、学級、職場その他の構造(9D)

を把握することも重要なテーマとなる(学級の例図9)。

ここではすでに主観的認知構造と客観的集団構造との関係が問題になる。自分の体験として作品を作る場合と、現実の集団構造として作る場合とでは差があるので、その関連を研究することも重要なテーマである(9E)。また双方の構造が一致することが、特に社会的実践における洞察としていかに評価しうるか(9F)、その過程の研究(9G)は、実践上重要である。なお集団の個人個人を同時に把握することが人間学的な重要なポイントであるがこれは(7)で述べた方法との並用による(9H)。

なお(7)で述べたのと同じく、小集団の各メンバーがそれぞれ自己の駒(あるいはそれと棹の双方)をもって集団場面に登場することは、我々がTグループなどの集団関係の吟味に実際に用いているものである。箱庭の材料を用いて特定の形または動物を自分に見たて、樹木などの背景を適当に用いる方法は、集団の箱庭療法ないし箱庭人形劇として述べた。(7)と同じく、人間関係、集団関係が前面に出ている臨床・福祉・教育実践上、もっとも実のりの多い測定=治療教育法とすることができ、次に並べる社会文化構造研究の中でも、図9にみられるように、たえず登場しうるものである。

(10) よりマクロ的な**社会・文化・生活構造**に関しては、まだ十分に有効な事例研究ができていないので、1部前述した関係性や小集団を基礎にした教育的社会福祉の実践の検討を中心に、若干の見通しを述べて今後にゆだねることにしたい。

組織・社会の構造として、たとえば自己が所属している職場を表現するようなときは、そのもっともフォーマルな組織面に着目すれば官庁や会社の通常の組織図になってしまう。障害児がどのようなルートで処遇されるかということについても、そのフォーマルな部分に着目すれば、たとえば児童相談所の窓口に貼ってあるような系統図になってしまうであろう。問題はこうした組織図を多少とも用いながらも、インフォーマルな集団、諸活動、重要な社会的機能、生活・文化的事象、個人の社会的態度までを含めて、いかに実生活に即したイメージを構成できるかということである。

多くの社会的文化的要素を配置すれば、どうしても実感を離れたものになり、またそこにかかわる主体を表現しにくくなるので、次節に述べるような工夫が必要になる。ここで本研究の見地からとりあえず指摘しておきたいことは、社会、文化が個人にたち現われる姿を実感的な語にしたカードから出発しなければ、体験を離れた抽象理論図式にすぎなくなってしまうということである。したがって総合的生活世界を作品化するにあたっては、

やはり身近な社会的体験から出発し、漸次生活世界の認知を広げ、社会学的に構造化しうる面をあとからチェックしていくという手段をとることが本研究にふさわしい。逆にいえば総合プロジェクトの客観的社會文化研究の側から個人体験においてくる部分と、この作品にあらわれた認知世界から広がっていく部分とが相接する点をも求めてもよいわけで、それは認知的生活世界と客観的社會・社會構造との相補性を検討するという社會学的テーマにつながるわけである(10)。

具体的にまず体験に密着した社會的実存の諸テーマを例示しよう。衣食住を含む日常的家庭生活(10A)、学校生活(10B)、職場生活(10C)、地域活動その他の社會活動(10D)、教育・臨床・福祉等の実践活動(10E)、その他の日常的生活狀況(10F)、非日常的事態(10G)などに対するかかわりかたがすべて研究対象になるが、図8は福祉関係の公立施設に勤務するある被験者が、その仕事の1部としてあるクライアントに向けた狀況を示す作品である。クライアントに対したとき、相手の深層にかかわっていく人間的な働きの根拠が漠然とした「内面」としてしかとらえられておらず、施設の職員としての役割や理論をもってしては相手の内面に近づけないことが示される。ここには感情カードは配列されていないが、しかし当局の福祉政策が処遇上不本意な役割につながるものとして重くのしかかっている。ただし、直屬の課長がその圧力を代表しているわけではない。また組合は臨床活動そのものに対してはあまり支えにも妨げにもなっていないようである。この作品を作った被験者が気がついたことは(もちろんカードの数の限定性にもよるが)職業的役割の矛盾や組織の圧力等に対して、さらにその背景の「社會」の感じが漠然としていること、そのような社會的矛盾とクライアントを差別しているような社會との関連がほとんど意識されていなかったことなどである。仕事をしているときに心が自分の家族から切り離されていることはむしろあたり前として受けとめた。

この例はテスト的に行なっただけなので、以上に述べた社會的洞察がさらに発展して組織や社會をより具体的にとらえていく作品、あるいはクライアントの内面をより具体的にとらえていく作品、それに応じて自分自身の内面をより具体的にとらえていく作品がいかにできあがっていくかは今後の問題である。たとえば障害になる社會狀況を作品化することができた場合、その狀況(ないしたとえば「官僚制」というカード)に対して、自分がどう立ち向かうという語句(たとえば「闘い」「言論」「妥協」「無力」「逃避」「仲間との連帯」等のカード)を置いて自己の姿勢ないし可能な社會的実存を問うことも

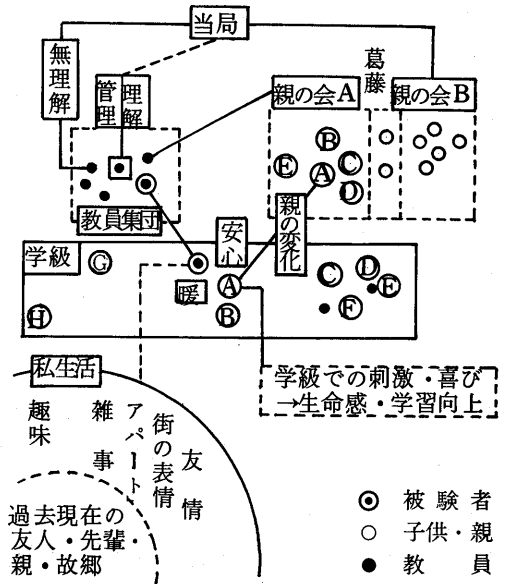


図 9

できる(10H)。

別の例図9は、ある障害児の小グループを指導している教育者の作品であり、この場合子供の集団はその心理的距離等によって表現されているが実際にプレールームでのある場面の構造を客観的に描くこともできる。複雑化を避けるために、母親グループおよびスタッフグループの詳細は省略しているが、親の会の対立が当局を媒介に教員間にもちこまれていることが分る。子供の1人1人の個別の世界については、1人の子供を代表にとって図示したのち、作品固定化の段階で短文になおしている。

筆者らの別の障害児福祉研究においては、各関係機関の組織図をまず採用することが多いが、諸機関の現実狀況や相互関係を、カードや針金で吟味してみると、ある自治体の行政の欠陥が、かなり浮きぼりにされる。実際に障害児をかかえたスタッフ、ボランティア、母親などに、それぞれの「自己」と「子供」の円形の駒を作らせ、この組織の間を右往左往してもらおうと、問題はあっさりするであろう。さらに障害児のかかえている主な問題、家族の生活上の主な問題をも作品化して総合してみるとときは、通常見落されていた具体的な点をも含めて総合的吟味がなされる。

このような組織検討や、図9におけるような集団図は、当然に一般の学校教育、クラスの集団図、グループワークの図などに適用されて、現場教育の実証的人間学の方法となる。社會教育面においてはさらに社會文化要素の配置が強調されよう。

以上のように、個人の内面から社會的要因までを含め

た図は、全体を実感しようとするればどうしても簡略化せざるをえないが、その社会的洞察効果(10I)、その他少くとも社会的実践・社会的実存の学に寄与することは可能であろう。とくに現象学的社会学・深層社会学等の理論を体験・実証ルートに載せる諸研究が今後探求されるであろう(10J)。これに対して、より客観的レベルでの社会学的構造・機能研究がいかに結びつきうるかは今後の課題である(10K——V節最後の注参照)。

なおここに記す余裕はなかったが、たとえば図9の教員の私生活図の部分の詳細をすれば、文化要素・構造が強くなる。この被験者(独身)は担当の子どものことを私生活ではあまり考えたり悩んだりせずむしろ切り離しているのであるが、私生活や内面が職業生活にさらに強くかかわっていれば、当然その関係性も示されることになる。

生活環境・生活文化の領域に関しても、この研究法が用いられるかどうかは今後の問題があるが、参考までに、現在本学生活科学研究会でアプローチされている越谷市元荒川流域の水質汚染に関する、物質的、人間的、文化的、社会的要因の、ごく主なものだけについて構造化を試みたものを図10として示す。認知的投影図としてよりは客観的因果関係ないし構造連関にもとづいた上での間主観的認知図だというべきであるが、流域の生活文化に関しては、絵地図のような投影的表現を用いることも、

体験科学との接点として考える。(図左上。○内は文化要素に対応するある住民のかかわりを投影的に配置したものである)。また図10に関連して越谷市、とくに元荒川地区の社会史、文化史の主な項目(戦後についていえば疎開、農地改革の影響、買出し、養鶏の発達、工場誘致、市制、立正女子大設立等)を配列して現在の構造との関連を図示することもできる。また何人かの住民の生活史の主な項目を、上記時代に対応して配列すれば、個人史と生活環境・文化との関連も体験的にとらえることができ、統計的一般論と「自分史」(色川・中公文庫)のような事例研究とを実証的に統合しうるかもしれない。

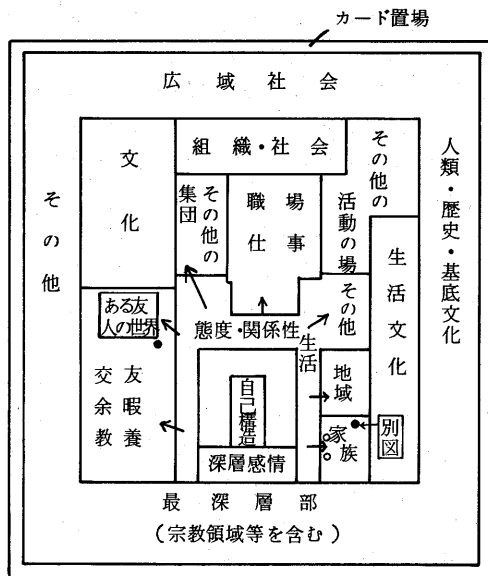


図 11

(II) 総合的認知世界投影盤：以上に述べたすべての領域を総合的に作品化することは、総合人間学を体験的実感にもちこむというもっとも野心的な試みである。たとえば模造紙を投影盤とし、上記3方法の材料を(必要があれば、絵・写真・短文等の補助要素も含めて)配列することである。前述したように、あまりに多くの要素と構造を全部実感することは不可能なので、体験学習的には、枠で各領域を区画して次から次へと見ていく方法、自己の駒を各領域に動かしてその関係性を実感していく方法などが需要である。また個々の要素が一見して実感されなくとも、全体が1つの芸術作品のように実感されるようにする探究の仕方もある。もちろん比較的領域から切り離された部分は、別の小盤面に置いて補足作品とすることもできる。なおかりに全体が実感レベルに至らなくとも、盤面は地を含んだ認知世界を現わしているわけであるから、それをもとに様々な事例検討は可能であ

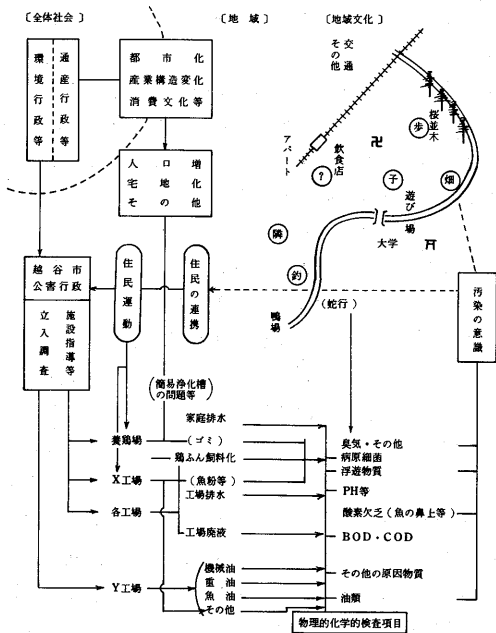


図 10

り、また検討しつつ材料を置きなおしていくことによって、少しづつは実感も高まるものである。

投影盤の総合的な作品例は、ぼう大になるので省略するが、たとえば図8～10のような比較的複雑な図に、さらに詳しい内面（感情構造や絵・箱庭）、その他の省略した領域を加えたようなものである。図11はその領域だけを例示したものであるが、実証研究のためには、こうした領域をあらかじめ指定し、普遍的代表的カードを（もちろん移動可能であるが）あらかじめ配置しておいた方が、認知世界構造化のために有利である。また各生活圏（図では自己からの矢印で示してある）における重要人物（集団の場合は代表的な1人）の生活世界や、その個人に対する自己の感情・態度をも記す方が、全体（社会）を見据えつつ同時に個人個人を具体的に認知するという人間学的課題に適している。図11の領域は、筆者の「人間学」（有斐閣双書）の各章および総合プロジェクトの各領域にほぼ対応して作ったものである。

（注）なお、筆者らは以上の操作をより容易にするため、ホワイトボードで盤を作り、マグシートでカードを作り、その他の材料もできるだけ盤面に密着させうる製品を用意している。この投影盤においては針金、箱庭の材料、色ペン、その他若干の必要な材料は別の箱に用意し、もっともよく使われるキーワード（感情語、態度語、人生、実存に関する用語、自然、社会、文化用語）および自由に記入できる白紙カードを盤の周辺に一定の秩序で視的に配列しておく（別の箱に用意してもよい）。被験者（製作者）は実感にもとずいて必要なカードをとり出して盤面に並べることができ、必要な語を自ら記入するなどのことができるわけである。なお、自分の核、父、母、その他の家族、その他のキーパーソンは円形の駒としてあらかじめ用意しておき、また自己の駒も用意しておく。（当然のことながら、(9)までに述べた比較的狭い個々の領域の投影図もホワイトボードを用いてよいわけである。）

V. 語研究の総合理解と限界

いままでに総合プロジェクト及び筆者の「人間学」（有斐閣双書）の体系に準拠しながら、テーマ別に研究法をみてきたが、そこで主として記してきたのは、

(a) 認知世界の中に条件を（変数として）設定して、法則や構造特性を把握する研究

(a') 現実の刺激条件を変数としたり、生活条件、社会的条件等を変数として認知世界の関数関係を把握する研究、を主としてきた。個人差（パーソナリティ）研究や治療・自己成長（体験学習）の研究に有効なことも若干記してきたが、系統的にはふれなかったため、最後にこ

れらの面について記し研究法全体をまとめておきたい。

(b) パーソナリティの統計的研究：既に若干指摘してきたように、今までに述べてきた3つのオリジナルなテスト、およびそれに関連する質問紙・評定スケール等は、それぞれの相互関係および既成のテスト（調査、観察を含む）との相互関係を吟味することによって、パーソナリティ研究となすことができる。すなわち、第1に以上に述べた諸テーマごとにそのデータの内部相関を明らかにすることによって反応の類型化をなし、因子抽出をすることができる。また適切な他のテストとの関係もそれぞれ求めることができる。また既成テストをそのまま用いずとも、たとえば感情カードのピラミッドにあわせて色彩ピラミッドを変形して用いるようなことによって、より総合的構造連関を把握しうるテストバッテリーを組むことも考えられるであろう。生理テストも含めたこれらの総合的テストは、人間学的総合理解に裏づけられたテストバッテリーとして探求しうるかもしれない。

(c) 個人・集団の人間学的理解：ある人物の ideographic（人物描写的）な事例研究にも、すでにみてきたように本法を補助手段として用いる。とくに現場などで簡単に行なわれている事例研究は、流れをふまえつつある時点での心的世界を構造的にとらえることに難があったので、この点を補充しうる。

なお本論では、縦断的な生活史研究には触れてこなかったが、配列の場を時間軸に添ったものにすれば、同じく本方法を準用でき、重要な要素やその相互関連を見落さないであろう。

また個人の人物描写と同様、集団や組織の事例描写に用いることは図9や投影盤から明らかである。ここでもその力動的な流れの相を含めてとらえること、とくにその中の個人個人の動きや内的世界の変化に応じて変化する相を明らかにしうる特長がある。（注）

(d) 心理療法・自己成長の体験学習：前述したように、ここで登場させた方法は単なる測定や投影法テストでなく、体験の実感に沿って作品を動かすことがカウンセリング的治療過程・自己変革過程に結びつくという特徴がある。これは本論の方法の理論的大前程であり、実際に現在進捗しつつある体験学習やカウンセリングの臨床的ケース研究において実証されつつある。本来は、治療・成長体験例を報告することが、本論の（現段階で結果が得られている）最も重要な結果報告であるが、紙面の関係で別の機会にゆずらざるをえない。カード式の方法と、図式的投影的方法、および両者の併用についていえば、治療、成長に結びつく体験の実感をもたらすためには1. あまりに多要素で複雑にならないこと、2. カードに記

された文字が実感的なものであること、3. 自由に移動させて連続的流れにそうこと、4. 注視ないしイメージ面接ないし言語面接が可能なこと、5. 一定の手続きののちには自由な作品創造にきりかえていくこと、が原則であり、経験的にほぼ実証されつつあるところである

(逆にいえばこの要件が満たされる限り、どんなヴァリエーションも可能である)。なおいままでの経験によれば、客観的実験研究および人格テストとしては、操作性がかなり高く、どんな実験者が行っても同様の結果がえられるが、体験の深いニュアンス、とくに治療的変化過程は、実験者がいかにカウンセラーとして適切にかかわるかによって全く違ってくるようである。

〔注意と限界〕最後に本研究法の問題点を略述しておきたい。第1に体験の実感を重んじることは、従来の客観的実証研究、とくに行動科学的方法においては意識的に避けられてきたものであり、それをあえて重視するからには、その限界がふまえられなければならない。(注)

一般に操作の実験ないしテストと、治療的体験学習的效果を同時にねらう場合、はじめの短時間で客観的条件設定のもとに前者を遂行し、次第に自由な表現にカウンセリング的に関与して後者をめざしていくのが常道である。

なお人格テスト研究としては、おそらく表面的な示標をとって統計研究しただけでは、既成の群小テストと同じ程度の貧弱な結果しかでない場合も多いであろう。むしろ体験の流動面、実感化の面を生かしてこそ、本方法としてのユニークな意味をもつ。それは具体的人物描写や治療方法としての最大のポイントとつながってくるわけである。

他方、現象学的研究、とくに人物描写ないし治療的事例研究の面からは、本研究法があえて要素や単純な図式を採用していることの限界がふまえられなければならない。もちろん余韻・余白を生かした全体的直観がこれを補うのであるが、それにしても仮説的に設定された主要素(とくにカードに記載された要素)に強くかかわる部分から全体的過程をすすめていくことになるわけで、したがって問題の所在に適した仮説設定・カード選択の技術が欠かせない。また自由セッション、自由イメージ面接、とくに自由な言語面接によって、たえず補われなければならないものである。

(注) 本研究法のカードシステムは図10に示唆したように、客観的根拠にもとづいた研究整理法としても発展させられる。すなわち文献・実証研究でえられたすべての重要要素(客観的事例研究の場合は事例の重要要素)をカード化して分類整理し、それを客観的連関ないし理論

体系にもとづいて構造化することである。総合的視野に立ち、かつ体系化しえない部分も切り捨てずに将来の課題となしうという長所がある。ただしこの場合は理論的、客観的根拠によってカード配列、構造化がなされなければならないわけで、本論で主に記してきた「実感的認知ないし投影」にもとづく作品の作り方は、はっきり区別しなければならない。本論での作品(図)はほとんどが主観的認知図であり、認知的世界の研究資料であることに要注意。事例研究も本人の現象的世界として探求することが本論の中心であったので、それと客観的事例研究とは一応の区別が必要である。認知世界と客観世界ないし理論体系との統合はあくまでその次のステップとしてである。

〔結び〕以上主としてオリジナルな3つの方法を用いて、広く人間学領域にわたる体験研究を一覧し、それが一般法則の発見、個人差(パーソナリティ)の法則的研究、人物描写的事例研究や集団・組織的事例研究、治療的自己変革的事例研究、等々にそれぞれかわる点を吟味してきた。実感的なナマの人間の過程を生かしつつ同時に実証研究としての人間科学のひとつの共通の広場になればと願っている。(1978・9・30)